

年間第二十四主日

2010.9.12

(ルカ 15:1-32)

今日のイエスさまのおことばはルカ福音書 15 章に収められている、多くの方にとって何度も聞いたことのある、なじみ深い、そしておそらく最も心に残っている大好きなイエスさまのおことばではないかと思えます。ミサの時間があまり長くならないように、今日の聖書と典礼ではルカ 15 章の中の最初の二つのお話だけを聞くようになっていますが、あらためて聖書を開いてみると、ルカ 15 章には今日の箇所のおとに、もう一つ大変印象深い、これも何度も聞いたことある放蕩息子のたとえと言われるお話が続いています。

そのようにルカ福音書 15 章の全体を見てみると、そこにはイエス様が語られた一つながりの三つのお話が収められており、そのいずれもが、迷い出た一匹の羊を探し当てた羊飼いの喜びを語るお話であり、なくした銀貨を見つけ出した一家の主婦の喜びを語るお話であり、放蕩息子の帰りを狂喜して迎える父親のお話です。そして、このような喜びこそが、私たち一人ひとりに向けられている父なる神のお心であるとイエス様は語りかけておられるのです。

もう少し詳しく見るなら、最初の見つけ出された一匹の羊のお話の結びには、「このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」と述べられており、見つけ出された銀貨のお話では、「このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」と言われています。このように見ると、これらのお話に続いて語られる父親のもとに戻ってきた放蕩息子の話は、悔い改める一人の罪人の具体的な姿を語るお話であると受け止めることができます。

悔い改めるとは、父親からせしめた遺産を手を、父親のもとを飛び出した息子が放蕩のかぎりを尽くした挙句に、自ら陥って行った悲惨な現実に打ちのめされて、初めて自分の愚かさを悟ったように、本当の自分に立ち戻って、再び私たちすべての者の父親である神のもとに立ち返るといことです。「放蕩息子」は私たち一人ひとりであるようにも、神さまの御目に映る人類全体の姿のようにも思えます。そのような息子たちの帰りを、狂喜して迎える父親の姿こそ、私たちの全ての者の父なる神のお心なのだといイエスさまは示してくださるのです。父なる神さまの大いなる喜びは天の全体に広がる喜びです。天のすべての天使たちを巻き込む大いなる喜びそのものです。イエス様に教えられて私たちが信じている私たちの父なる神は、そのような喜びの渦の中心におられる私たち全ての者の父なる神です。私たちのこの世の、父なる神のもとを離れ去った「放蕩息子」としての悪戦苦闘がいつか自己破産し、挫折する時、その惨めさの中から

立ち上がることができるなら、もう一度自分が見捨てた「父の家」を思い出すことができるなら、私たち全ての者の立ち帰る日を待ちわびてくださる父なる神の愛の懷の中で、私たちは、私たちの首を抱きしめてくださる父なる神の無限の喜びの中にいる自分を見出すことが出来ることでしょう。

イエス様が語り聞かせてくださった、父なる神の愛の福音を信じるとはこのようなことです。何度も何度も、イエスさまのこのお話に耳を傾けなければなりません。人生に行き詰まり、あらゆるものが信じられなくなる時、人間関係に疲れ、自己嫌悪の闇に落ち込む時、イエス様が語り聞かせてくださったこの福音を、放蕩息子が父の家を思い出したように、思い起こさなければなりません。自分がたとえどのような状態の中にあっても、イエスさまのこのお話が私たちを立ち上がらせてくるように、何度も何度もこの福音のおことばを心に刻んでおきたいと思います。

放蕩息子のお話の最後に登場する、帰って来た放蕩息子の兄に対する父親のことばは、私たちに対する警告でもあります。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ、祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」。兄息子に対する父親のこのことばが私たちにとっても警告であるのは、今日の福音のルカ 15 章の最初に触れられているファリサイ派の人々や律法学者たちにとってそうであったように、イエス様が語り聞かせてくださる父なる神の愛を本当に信じるということは、私たちにとってもそれほど易しいことではないからです。ルカ 15 章に収められたイエスさまの三つのお話は、父なる神の愛を語るイエス様の福音のメッセージの中心であり、聞くたびに私たちの心を打ち、慰めに満たすお話です。けれども、父なる神の私たち一人ひとりに向けられている愛を語るイエス様のこの福音を信じるということは、振り返って反省してみると、そう簡単なことではないことが分かるはずです。

イエスさまのこの福音のおことばによって本当に救われるためには、イエス様がそのご生涯の全ての時にそうされたように、父なる神との内密な深い関係を持ち続けることが必要です。

今日の第一朗読には、十戒の禁令を破って、金の子牛の像を作り、その前に膝をかがめ、主なる神の怒りの裁きを宣告されたイスラエルの民のために、身を投げ出して執り成すモーセの姿が描かれています。モーセは主なる神に呼び出され、主なる神に遣わされたイスラエルの民の指導者、神と人々との仲介者としての、苦悩に満ちた長い年月、神のみ前に立ち続けることによって、「主はご自分の民に下すと告げられた災いを思い直す」、憐れみ深い父なる神であることを知っていたのです。

第二朗読のパウロのことばも、私たちの胸を打ちます。ダマスコへの道の途上で劇的な回心を経験したパウロは、最初の教会の最も偉大な宣教者として、その全てを福音宣教のために捧げ尽くした後でも、かつて自分がどのような者であったかを、片時も忘れることはなかったのです。「以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。『キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしはその罪人の中で最たる者です。・・・わたしが憐れみを受けたのは、・・・わたしが、この方を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の手本となるためでした」。ここに、その長い苦闘に満ちた宣教の生活を通して、最初のあの回心の経験を自分の中に深めて行った、パウロの自分自身の経験に裏打ちされた、神の憐れみの愛による救いに全てを賭ける信仰理解が語られているのです。

モーセがそうであったように、パウロがそうであったように、私たちの人生を貫く、神を信じる者として長く苦しい、信仰における神とのかかわりの中で、今日の福音の神の愛を語るイエス様のお言葉が、私たち一人ひとりに向けられた神の愛の物語として、私たちの人生を形づくり、彩るものとなるよう祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高